
騎士と魔女

前歯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士と魔女

【Nコード】

N6261F

【作者名】

前歯

【あらすじ】

生きる目的を見失った騎士、アルクは森の中でアルメニアという少女と出会う。徐々に惹かれ合う二人。しかし、平穏は突如破られて……

第一話（前書き）

こんにちは。

久しぶりに登場いたしました前歯です。

未熟者ですが、読んでいただけたら幸いです。

第一話

ゆっくり、ゆっくりと、生気を失ったかのような表情で歩いていく青年が一人。

自分の戦いに、何の意味があったのだろうか。

いや、意味などなかった。俺はただ、無意味な戦いに身を投じていただけだ。自分の目的を見失っていたんだ。

もう何度繰り返したかもわからない自問自答を、青年は再び繰り返す。

短く切り揃えられた金髪に、美しい海を連想させるマリンブルーの瞳。顔立ちもなかなか整っているのだが、今はその美しい容姿も、彼の暗い感情のせいかな、全くその輝きを発していない。

とぼとぼと歩いていくその青年、アルクは、急に立ち止まった。

「ああ、ここが入り口か」

彼の目の前に広がるのは、怪しげな雰囲気漂わせた森。その入り口の部分に彼は立っていた。

「ここが、『最果ての森』か」

アルクは呟く。

「今の俺にはお似合いの森だな……」

輝きを失った彼の瞳も、今は目の前の森を力無く見つめている。

「俺は、何も守れなかった……」

静かにそう呟くと、アルクは真っ直ぐに、森の中へと入っていった。

☆ ☆ ☆

森の中に入って、しばらく経った時のことだった。

不意に美しい音色が聞こえてくる。

何の音だろうか。

アルクは思わずその音色に聴き入ってしまう。よく聴くと、それは歌声だった。

その歌には、想いが込められていた。

ただ純粹に、真っ直ぐに。

優しい世界を、歌っていた。

理屈はわからない。

だけど、心に響く。そんな歌だった。

少しの間その歌声に聴き入ってから、ふとアルクの頭に疑問が生じる。

この『最果ての森』には、誰もいないはずだ。いや、いたとしても、それは人外の何かである可能性が高い。王国の西端に位置するこの森は、古来より魔物が住み着いていると言い伝えられ、人々から恐れられていた。それと、人里離れているという立地条件が相まって、普段は誰も近づこうとはしない。

そんな場所に、人がいること自体、異常なのだ。

疑問への答えを求めるべく、アルクは歌声の方向へと歩いていく。少しずつ、歌声に近づいていく。

そこは、最果てと呼ばれるこの森において、『異質』な空間だった。

アルクの眼前には家。人など住むはずのないこの森に、木造の小屋が建っている。それは小さな小屋であったが、人が住むには申し分ない大きさのように見えた。それだけでも十分異質なの

だが、最もその空間において異質だったのは、その家のすぐ側に置いてある椅子ではなく、そこに座る少女であった。

腰まで伸びた艶やかな黒髪。全てを包み込むような優しい瞳。それでいて、その黒き瞳の奥には、力強い意志が秘められているように見える。服装も黒で統一されており、どことなく神秘的なイメージを感じさせる。

容姿を見る限り、年の頃は十代後半くらいであろうことが想像できる。整った顔立ちに色白の肌。それがまた、彼女の神秘的なイメージを強調していた。

その少女が、先ほどから聞こえてくる歌声の主であった。美しい。

アルクは目の前の光景そのものを、美しいと思った。だが、眼前に広がるその光景は、急激に暗く染まっていく……

ここ数日、ろくに食事もとっていなかったアルクの身体は、限界を迎えていたのだ。

バタリとその場でアルクは意識を失ってしまった……

☆ ☆ ☆

「う……」

アルクの意識が戻った時、彼はベッドの上に横たわっていた。

「ここは？」

周囲を見回す。どうやら誰かの家であろうということはわかるのだが、それ以外のことは何もわからない。

意識を失う寸前に見た光景から推測すれば、ここはあの少女の家のなかかもしれない。

「よかった、気がついたんですね」

彼に話しかけてきたのは、先ほどの少女だった。

「ここは……」

「私の家です。近くであなたが倒れているのを見つけて、運んできたんですけど」

「すまない、重かっただろう」

アルクは非常に申し訳なかった。大の男をこんな少女が家に運び入れたというのだから、相当苦勞したのだろう。

「いえいえ、大丈夫ですよ。無事で良かったです」

温かな笑顔を向け、少女は答える。

「私は、アルメニアといいます。呼びにくかったら、アニーって呼んでください。お婆ちゃんはそのう呼んでました」

アルメニアと名乗る少女は、微笑みを浮かべながらアルクの方を見ている。

「俺の名は、アルク。迷惑をかけてすまなかった、アルメニア」

アルクは名乗り、すぐにベッドから立ち上がろうとする。

「ま、待ってください。まだ安静にした方がいいです」「いや、これ以上迷惑をかけるわけにはいかない」

アルメニアの制止を振り切り、立ち上がろうとするアルク。

「迷惑なんかじゃないです。このまま外に出られて、また倒れられる方がよっぽど迷惑です!」

「あ、ああ……わかった。わかったから落ち着いてくれ」 必死で制止するアルメニアに、アルクは半ば勢いに押されたようなかたちでベッドに納まった。

「お腹空いてませんか? ご飯、持ってきますね」

「いや、あ……」

アルクは断わろうと思ったのだが、アルメニアはさっさと食事を取りに行ってしまった。

あのまま死んでしまった方が良かったのかもしれない。

そんな考えが頭に浮かぶ。

今の自分は死人同然だ。

王国騎士団を抜け、この、最果ての森まで歩いてきた。

アルクは家族を守れなかった。王国騎士団で働くことが、家族を守ることにとなると、アルクは信じていた。

その家族を、失ってしまった。守りきることができなかった。

その自責の念が、彼を追いつめたのだ。誇りも、戦う意味も失い、彼はこの森へやって来た。

ただ自分は逃げているだけなのだと、アルクはわかっている。だが、それを受け入れられないほどに、彼が受けた衝撃は大きかった。「俺は、一体どうすれば……」

そう呟くが、何も思い浮かばない。自分はさっさと死ぬべきなのか、はたまた生きて何かを成し遂げなければならぬのか。

アルクにはわからなくなっていた。

この森には、死ぬつもりで入ってきた。

だが、彼はアルメニアに助けられた。瞳に強い光を秘めた少女に彼女を見ていると、不思議と生きなければならないような気がしてくる。

「簡単なんですけど、どうぞ召し上がってください」 アルクが考えていると、アルメニアが食事を運んでくれた。

「……すまない。ありがとう」

アルクはそれを素直に受け取る。

パンとスープ、そしてサラダを、アルクは頬張る。

さすがに空腹は限界に達していたので、一度食べ出すと止まらなかった。

あつという間に完食してしまった。

「ごちそうさま。おいしかった」

「良かったです、お口に合わなかったらどうしようかと思ってました」

アルメニアはにっこりと微笑む。

「アルメニア……でよかったよな？」

「はい、アルメニアです。アニーでも構いませんよ」

「あんたは、何でこんな所に住んでるんだ？」

「私は……」

アルクが疑問に思っていたことを質問すると、アニーは口を閉じる。何か言いづらいことでもあるような様子だ。

「言いたくないのならいい。変なことを聞いてすまなかった」

「いえ……アルクさんは、何故この森に？」

「俺は……」

しばしの沈黙。

「ご、ごめんなさい。と、とにかく、もし行く所がないのなら、いつまでも家にいてかまいませんから」

アルメニアの親切がボロボロになったアルクの心に染みる。

何故、こうもアルメニアは親切にしてくれるのだろうか。見ず知らずの男に。

アルクはそう思う。

「いや、しばらくしたら出て行くよ、ありがとう」

さすがにこれ以上迷惑をかけるわけにはいかないと思ったアルクは、そう返しておく。

「そうですか……」

「ああ。俺はもう少し寝て、疲れをとらせてもらおうよ」

すぐに出て行こうとはしていたものの、アルクの身体にはやはり疲れがたまっていた。

「はい、ゆっくり休んでください」

快く承諾してくれたアルメニアに軽く礼を述べ、アルクは再びベツドの上で横たわる。

「歌、うまいな」

「え？」

突然発せられたアルクの言葉に、アルメニアは驚いた。

「歌ってただろ。俺が意識を失う前」

「あ、ああ。ありがとうございます」

アルメニアは少し目を伏せ、嬉しいのか、悲しいのかよくわから

ない表情で返事をする。

「じゃあ、すまないが、休ませてもらうよ」

「はい、お休みなさい」

アルメニアに一言断りを入れてから、アルクはゆっくりと目を閉じた。

第一話（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見感想などありましたら、是非記入をお願いいたします。

第二話

アルクがアルメニアの家に来てから、一週間が過ぎようとしていた。

もう身体は大丈夫なのだが、なんだかんだでここにいる自分を、アルクは不思議に思っていた。

アルメニアの温かさが、彼の心の傷を少しずつ癒しているのかもしれない。

しかし、いつまでも迷惑をかけていいのだろうか、という罪悪感もアルクにはあった。森の中へ食料を収集しに行くぐらいのことはしているが、迷惑をかけていることに変わりはない。

「アルクさん、もうすぐご飯できますからね」

昼食を作りながら、アルメニアがアルクに言う。

「はい、どうぞ」

テーブルにつき、二人で昼食をとる。

「私、嬉しいんです。こうやって一緒に食事をとる人がいるのが。お婆ちゃんが亡くなってから、ずっと一人でここに住んでいましたから」

彼女は本当に嬉しそうにそう言う。

「アニー」

ここ数日で、アルクはアルメニアをそう呼ぶようになっていた。一週間という僅かな時間の中で、二人はとても親しくなっていた。

「俺、本当にここにいてもいいのか？」

罪悪感に駆られたアルクは、そう尋ねた。

「はい、いてくれると、私も嬉しいです」

少し頬を赤らめて、アニーは言う。

「……ありがとう」

アルク自身、ここが自分の居場所のような、家のような気がしてきていた。しばし躊躇いはしたが、ここに残ることが、自分にとっ

て一番良い選択なのではないかと思った。

「なんだか新しい家族ができたみたいで、嬉しいです」

そう言ってニコツと笑うアニーを見て、アルクは胸の奥に何か温かいものが広がっていくのを感じた。

☆ ☆ ☆

その日の夜、アルクとアニーは、家の外に出て、星空を眺めていた。

「綺麗ですね、星を見てみると、心が落ち着きます」

「ああ、そうだな」

返事はするものの、アルクの表情は曇っている。

アニーはそれを心配そうに見るのだが、アルクは何の反応も見せない。

「俺、この森に来た時、もう死んだ方がいいんじゃないか、と思ってた」

少し間をおいて、アルクは重い口を開いた。

「え？」

「俺は、王国騎士団の騎士だったんだ……」

アルクは、自分のことを話さずにはいられなくなっていた。彼自身、アニーのことが家族のように身近な存在に思えてきていたからかもしれない。

そして許せなかったのだ。家族を守ることもできなかった自分が、平穏な暮らしを取り戻そうとしていることを。

「いつも、王国の為に戦うことが、家族を守ることもなっているって、信じてた。でも、俺は家族を守りきれなかったんだ……」

「……」
アニーは黙ってアルクの話を聞いていた。

「俺はその日、騎士団の任務で自分の住んでいた街を離れていた。その間に、俺の家族は殺されたんだ。以前俺が捕まえた罪人が、俺への復讐のために、俺の家族を……父も、母も、妹も……妹は結婚間近だったのに……」 吐き出してしまおう。全てを。自分の背負う咎を。

「俺は、守れなかった。家族の為とか言いながら、俺は何一つ守ることはできなかったんだ！」

口調が激しくなっていく。

もう、もう何もかも話してしまおう。

そう思った。

「俺は、戦う意味を失った。そして、生きる価値すらも自分にはないような気がして、それで、騎士団を抜けて、ただただ歩き続けた。そして辿り着いたのが、この森だったんだ」

アルクはそこまで言うのと黙ってしまおう。アニーの返答を待つかのように。

「生きることから、逃げないでください」

ゆっくりと、アニーが口を開いた。

「過去に何があっても、家族を守れなかったとしても、それでも、生きてください」

静かに、だが力強くアニーは言う。

「生きることの方が、戦いですから」

力強く、言い放つ。

「希望の光を、見失わないでください。どんな絶望の中にも、必ず光がある、っていつもお婆ちゃんが言っていました」

「だが、何も守れなかった俺が、これから一体どんな顔をして生きればいいんだ……」

アルクは目を伏せる。

「アルクさん、私の話も、聞いてもらえますか？」

そう言われ、アルクはアニーの顔を見る。アニーはどこか物憂げな表情をしていた。

「私、魔女なんです」

唐突に放たれたその言葉は、アルクを驚愕させた。

魔女——それは人々に忌み嫌われる存在。存在そのものが悪だとされている、人々の恐怖の対象。

アニーがそれだとは、アルクには信じられなかった。「私の両親は、魔力なんて持ってませんでした。二人とも普通の人間で、私のことを可愛がってくれました。でも、私が十歳になる頃に、私は魔法が使えるようになっていました。それが何故なのかは、わかりませんけど。両親はそれを知っても、私のことを守ってくれました。魔法の力を人に見せないように、と言って。でも、その頃の私は、感情の高ぶりによって暴走する魔法を、制御できなかったんです」

そこまで話すと、アニーは溜め息をつき、思い出さくないものを思い出しているような、そんな沈んだ表情で、続きを話し始める。「そしてある日、私はひょんなことから魔法を暴走させてしまいました。それがきっかけで、私が住んでいた村の人々に、私が魔女だと知られてしまったんです。その後は、ひどいものでした。父と母は殺され、命からがら逃げ出した私は、行く当てもなく彷徨っていました。そして、この森に辿り着いたんです。そこで私は、限界が来て倒れてしまいました。そこを、お婆さんが助けてくれたんです。お婆さんも、魔女でした。お婆さんからは本当にいろんなことを教わりました。でも、そのお婆さんも三年前に亡くなりました。私が、十六歳の時でした」

哀しみに満ちた表情で、アニーは語る。自分の過去を。「でも、私は人間を嫌いにはなれません。お婆さんは教えてくれました。人間も魔女も、同じだって。人の心さえ持っていれば、魔女だって、例え魔物だって人と同じなんだ、って」

強い女性だと、アルクは思った。

「アルクさん、あなたも、私は人間じゃないと思いますか？」

愁いを帯びた表情で、アニーは問う。

「君は、人間だよ」

迷わず、答えた。

彼女ほど心の清い人間が、他にいるだろうか。魔女である以前に彼女は人間だ。心優しく、そして心の強い、女性だ。

「優しくて、強くて……そんな君に、俺は救われた」

アルクは自分を情けなく思っていた。こんなに重い過去を背負いながら、それでも希望の光を見失わず強く生きている少女がいるというのに、自分は何をやっていたのだろうか。ただ過去から逃げ、果ては生きることからも逃げようとしていた。己の過ちを悔いる。

「ありがとう……」

アニーの目からは、涙がこぼれ落ちる。それは、止めどない感情の奔流だった。

アニーは、お婆さんが亡くなってから、ずっと一人で生きてきた。誰も近寄らない、この森で。

無駄な争いを避けるため、アニーはずっと一人で生きてきた。

寂しかった。

一人は、辛かった。

泣くこともあった。

でも、彼女はやっと、自分のことを人間として認めてくれる相手に出会ったのだ。

喜び、安堵。様々な感情が、その涙には含まれていた。「俺は、生きるよ」

アルクは生きることを決意した。

そして、アニーを守る騎士となることも。

何も守れなかった自分だが、今度は、必ず守りきろうと思った。今度は、死んでも守りきる。

彼女だけの騎士に、俺はなろう。

そう思った。

この日、二人は約束した。希望の光を信じて、精一杯生きること

第三話

二人が一緒に住むようになって、数週間が過ぎた。

「アニー、町へ行ってみないか？」

「え？」

朝、唐突にアルクがそんなことを言い出したので、アニーは少し戸惑ってしまう。

「町に連れて行ってあげたいんだ。今まで、ずっとこの森にいたんだろう？」

アルクはどうしても、アニーに外の世界を見せてあげたかった。ずっとずっと、アニーは寂しい思いをしていたのだ。何年も何年も。

だから、アルクはその空白の年数をできるだけ埋めてあげたかった。楽しい思い出を、今からでも作ってあげたかったのだ。

「でも、もし、私が魔女だということが知られてしまったら、大変なことになりますから……」

アニーも外に出たくないわけではない。だが、外に出たいという気持ちよりも、魔女だということが人々に知られてしまうことを恐れる気持ちの方が上回っていた。もし知られてしまったら、自分だけではなく、アルクにも危険が及ぶ。それだけは避けたかった。

「大丈夫、君は人間と同じさ。魔法さえ使わなければ、わからないよ」

「でも……」

「何があっても、俺が守るよ」

アルクは固く誓う。

今度は必ず守り抜く、と。

「だから、行こう」

真っ直ぐ、アニーの目を見て告げる。

「……わかりました。私も、行ってみたかったですから。町に」

しばし躊躇った後、アニーが返事をする。

「じゃあ、早速行こう」

「はい」

二人はすぐに準備を始める。その表情は、とても、楽しそうだった。

☆ ☆ ☆

「わく、綺麗」

賑やかな昼の町で、アニーが感嘆の声をあげる。数々の露店が並ぶ通りに、二人は訪れていた。

「これ、買ってあげるよ」

アニーが目を輝かせて見ていたのは、空色の美しい輝きを放つ宝石のついた、ペンダントだった。

「これください」

アニーは、「そんな、いいですよ」などと言っていたが、アルクはすぐにそれを購入する。髭を生やした店主が、「お二人さん恋人同士かい？ いいね」などと冷やかしてきたが、アニーが照れて黙り込んでしまったので、アルクは否定しておいた。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

はにかんだ様子で、早速ペンダントを首につけるアニー。とても嬉しそうなその様子を、アルクも嬉しそうに見る。

「似合ってるよ」

アルクがそう言うと、アニーはさらに頬を赤らめてしまう。

「えっと、じゃあ、あの……これ、受け取ってください」

アニーはそう言って、懷から何やら取り出し、アルクに渡した。それは、紫の輝きを放つ宝石のついた、指輪だった。

「これ、お婆ちゃんの形見なんです」

「そんな大事なものの、受け取れないよ」

アルクはすぐに返そうとするのだが、アニーは首を振り、

「いえ、あの……これペアになってるんです。ほら」

そう言っ、自分の指にもはめてある指輪を見せた。どうやら同じ物らしい。

「お婆ちゃんが、いつかあなたのことを認めてくれる人が現れたら、渡してあげなさいって……」

「い、いいのか？ 本当にもらっても」

まだ本当にもらっても良いのだろうか、と思っていたアルクだが、半ば強引に指輪を渡されてしまう。

「はい……でも、えっと、その……ペアだと恋人同士みたいで恥ずかしいですね。その、嫌だったらつけなくてもいいですから」

真っ赤になりながらそう話すアニーを、アルクは可愛いと思った。

「いや、ありがとう。早速指にはめてみるよ」

そう言っアルクは指輪をはめる。

気が付けば自分も少し赤くなっていた。

「誰か助けて！」

和やかな雰囲気壊したのは、女性の叫び声だった。「うちの子が！」

すぐに二人は声のした方向を向く。

「金をよこせ！」

そこでは、三人の男が、小さな男の子を人質にとって金を要求していた。

「わかったわ、お金は渡すから、その子を放して」

必死に懇願するのは、子供の母親のようだ。母親は雑貨屋の店主らしい。

「金さえ渡せば、すぐに放してやる。さあ、さっさとよこせ」

男達の要求に、母親が、恐る恐る金を渡そうとする。　が、すんでの所で男が吹き飛ばされたため、お金が手渡されることはなかった。

「つてえ……何してくれやがる！」

男の眼前には金髪の男。

そう、アルクが立っていた。

「幼い子供を人質にとって、情けないと思わないのか？」　そう言った直後には、子供を捕らえていた男が綺麗に放物線を描いて宙を舞う。

アルクが凄まじい速度で蹴り上げたからだ。

「さあ、お母さんの所へ」

すぐに子供を母親の元に逃がす。

そして、

「がはっ」

もう一人の男を殴り飛ばす。

アルクのスピードに、男達は全くついていけない。

アルクの完全勝利。そう思われた。

が、

「おい、そこから一步でも動いてみる、このガキの命はないぞ」
迂闊だった。

そう、アルクは思った。

男達にはもう一人仲間がいたらしい。

「わかった」

アルクは止まる。

「そう、それでいいんだ」

男は子供の喉元にナイフを突きつけている。

「さつきはよくもやってくれたな」

先ほど倒した三人の男が、アルクの所にやって来る。

「たっぷりお返ししてやるよ」

二人の男が身動きがとれないようアルクを拘束する。

アルクは反撃のチャンスを探うが、なかなか動くことができない。迂闊に動くと、子供が危ない。

そうこうしているうちに、もう一人の男がナイフを持ってアルクの腹部を刺そうと、ナイフを突き出した。

その時。

「やめて！」

アニーの叫び声が、その場にこだまする。

その声と同時に、男のナイフが宙に浮き、ゆらゆらと男の手元から離れていく。

「え？」

男が何が起こったのかわからず、間拔けな顔をしている。

アルクは瞬時に目の前の男を蹴り上げ、両脇で自分を拘束していた男を振り払う。

「ふ、ふざけんな、ガキを殺すぞ！」

人質を取っていた男がナイフで子供を軽く斬りつけようとしたが、そのナイフは凄まじい速度で空中に飛んでいった。「な、何なんだよ一体!？」

男が混乱する。その顔には恐怖すら浮かんでいる。

その男にとどめを刺すかの如く炸裂するアルクの拳。

それは男の右頬を直撃。男は綺麗にくるっと一回転して地面に叩きつけられた。

「に、逃げる！ こいつらなんかヤバイ！」

男達は一目散に逃げ出した。

強盗たちは追い払ったが、周囲からはざわめきが聞こえ始めていた。

「おい、あれって……」

「あれ、魔法だよな」

「魔女だ、魔女がいるぞおおおお！」

アニーは、使ってしまった。

魔法を。

人助けのためとはいえ、使ってしまったのだ。

この場にいるほぼ全ての人間が、彼女を気持ち悪いものでも見るような目で見ている。

「魔女だ、捕まえろ、捕まえろおおおお！」

「逃げるぞ！」

悲しい表情を浮かべるアニーの手を引き、アルクは必死で走った。とにかく、逃げ切るしかない。

二人は町を抜け、森を目指してひたすら走り続けた……

第四話

アルクは罪悪感に苛まれていた。

あの後、なんとか家まで戻ってこれたものの、それからずっと、アニーの表情は曇っており、元気をなくしている。

自分のせいだ。

そう思わずにはいられない。

この世界は、何故こうも彼女を受け入れられないのだろうか。

人と同じように、笑ったり、泣いたり、怒ったりする彼女が、何故人間ではないと言われなければならぬのだ。

アルクは理不尽なこの世界に怒りを感じていた。

「アニー、すまなかった。俺のせいで……」

謝罪の言葉が出てくるが、こんなものでは自分の罪を償えないというのはわかっている。

「いえ……アルクさんは悪くないです」

「いや、俺のせいだ」

「そんなこと、ないですよ。今日は、もう寝ますね」

力の無い声で、そう言ったアニーは、ベッドに向かった。

アルクは複雑な表情でその姿を見送った……

翌朝、朝食をとっている間も、アニーは元気がなかった。沈黙が、

朝の食卓を支配していた。

「アルクさん」

唐突にその沈黙を破ったのは、アニーの言葉だった。

「ん？」

「ちょっと、一人にしてくれませんか？ 少し、一人で考える時間が欲しいので」

静かにそう呟いたアニーに、アルクは悲しげな顔で頷いた。

「わかった……でも、あまり一人で抱え込まないで欲しい。君は一

人じゃない」

そう言って出かける準備を済ませ、アルクは家を出て行った。

☆ ☆ ☆

とぼとぼと、歩いていった。

アルクは一人、森を抜け、町に辿り着いていた。町に何か目的があるわけではない。

ただ、当てもなく歩いてきたら、町に近づいていただけだ。本当にこれで良かったのだろうか。

そう思いながらも、ただひたすらに歩き続ける。

アニーを一人にしてよかったのだろうか。

守り抜くと、誓ったのではなかっただろうか。

いろんな事が、頭に浮かぶ。

「俺は、また、何も守れないっていうのか」

自分に対して、激しい憤りを感じる。

その時だった。

不穏な会話を耳にしたのは。

「おい、この間の魔女、どうやら最果ての森に住み着いてるって噂だぜ」

「ああ、王国騎士団が討伐隊を結成して、明日、森に派遣するらしいぜ」

「これでもう安心だな」

「ああ、さっさと討伐して欲しいもんだぜ。魔女なんて」 町の人々の話し声だ。

アルクは、またも自分を責めた。

俺のせいだ。

俺のせいで、こんなことに……

自責の念は大きくなるばかりだが、彼は思う。

このままだと、家族を失った時と同じになると。

ここで立ち止まってはいけない。

生きる意味すらも見失いかけていた自分に、希望の光を与えてくれたのは、誰だったか。

誰よりも優しい心を持った彼女。

誰もいない森の中で、一人孤独に、優しい世界を歌い続ける彼女。悲しい過去を背負いながらも、強く生き続けてきた彼女。

彼女の笑顔が、アルクに力をくれた。

いつしか彼女は、アルクの心の支えになっていた。

だから今度は、自分が彼女を救いたい。

彼女と一緒に生きていくことが、今のアルクの願い。

そして、彼女を守り抜くことこそが、アルクにとっての、生きる意味。

だから、

もう、迷わない。

俺は、

彼女を、

守り抜く！

もう何者も、アルクの意志を止めることなどできない。彼は森

へと走り出した。

☆ ☆ ☆

その日の夜、森に帰ってきたアルクは、アニーと一緒に夕食をとっていた。

「アルクさん、私、考えたんですけど、やっぱりあなたと一緒にいるわけにはいきません」

思い詰めた表情でアニーが言った。

「私といると、あなたは不幸になってしまいます」

昨日の一件で、アニーは思った。やはり自分は人とは相容れない存在なのだと。

そんな自分と一緒にいては、アルクを不幸にしよう。

そう思ったのだ。

「そんなことはないよ、アニー」

ゆつくりと、だがはつきり、アルクはそう告げた。

いつしか、彼女といることそのものが、アルクの幸せとなっていたのだ。別れを告げられた所で納得できるはずがない。

「俺にとっては、君と一緒にいること自体が幸せなんだ。だから、君と離れてしまうと、それこそ不幸になってしまう」

アルクはアニーの目を真っ直ぐに見つめて、自分の思いの丈を語る。

「でも、私は……」

涙を流すアニーを、アルクは抱きしめた。

「俺は、君を愛しているんだ」

真っ直ぐに、自分の想いを述べる。

「愛する人と一緒にいたいというのは、そんなにおかしいことか？」
アルクの真っ直ぐな告白に、アニーは更に涙を流す。

「私も……私もアルクさんと一緒にいたいです。愛しています」
泣き声混じりの声で、アニーも想いを告げた。

「君のことは、必ず俺が守る」

アルクは誓った。今度こそ、この身が朽ち果てようとも、大切な人を守り抜くと。

深夜、アニーが眠りについた後、アルクは一人、家を抜け出した。

討伐隊は、自分一人で食い止める。アニーには何の心配もかけたくない。

だから一人で、戦うことを決意したのだ。

暗い森の中を、アルクは必死に駆けていく……

☆ ☆ ☆

翌日の朝、魔女討伐隊は最果ての森へと向かっていた。「各員、森に入ったら全力で魔女を捜せ。発見次第、他の隊員及び俺に報告。以後、俺の指揮下で殲滅に移る」「了解！」

魔女討伐隊の隊長、レックスは、隊員に任務の説明を行っていた。バイオレットの長髪を風になびかせ、レックスは歩く。背中には、その細めの体格に似合わぬ大きな剣。身の丈ほどもある、その大剣を背負っているにも関わらず、全くそれを苦としていないような様子である。

この討伐隊は、王国騎士団の団員の中から選抜された者だけで構成されている。彼は、若くしてその才能を買われ、隊長に任命されたのだ。

「魔女狩りか……面倒な仕事を押しつけられたものだ」レックスはぼやきながらも歩き続ける。

周囲からは、ドシッ、ドシッと、身につけた鎧の重量のせいで響く音ぐらいしか聞こえない。

そして、討伐隊は森の入り口へと辿り着いた。

「ん？」

森の入り口は、すぐそこに見えている。

が、入り口の側に人影が見えた。

こんな所に何故人が？

と、レックスは疑問に思う。

入り口に近づいていくにつれて、徐々に人影がはっきりと見え
くる。

そこには、男が立っていた。

たった一人で、

瞳に強い意志の光を宿らせて、

立っていた。

第五話

アルクは、森の入り口で討伐隊を待っていた。

そして、ついに討伐隊が眼前に迫ってきた。

アニーには、何も告げていない。

何故なら、必ず守り抜くからだ。この森に一步たりとも敵を入らせる気はない。

「レックス？」

アルクは、目の前にいる敵の姿を見て、驚愕の表情を浮かべた。

「アルクか？」

その敵も、レックスもまた、驚愕の表情を浮かべる。

二人が驚愕するのも無理はない。

二人は今、互いに親友を目の前にしているのだから。

「アルク、今までどこにいたんだ！ さあ、さっさと騎士団に戻って来い」

レックスは行方不明になっていた親友を、騎士団に呼び戻そうとする。

「それはできない。俺には、守らねばならない人がいる」

そう、アニーを守らねばならない。

「何？ お前、もしかして……」

「魔法の討伐隊っていうのは、お前達なんだよな？ レックス」

「ああ、そうだ。お前、魔法を守ろうとしているんじゃないだろうな？」

「そうだ。俺は、彼女を、アニーを守る」
宣言する。力強く。

「何を考えているんだ！ それが、どういうことかわかっているのか？」

「逆に問う。何故魔法を殺さねばならないんだ？」

「魔法は人間にとって脅威と言える存在だ、それを討伐するのは人

々を守ることに他ならない」

「彼女らが一体何をした？ 罪もない人々を殺しでもしたっていいのか？ 彼女らだって、人間と同じだ。人を慈しむ心や、誰かの死を悲しむ心だってある！」

そうだ、アニーは人間と同じなんだ。

アルクは叫ぶ。

親友に向かって、

精一杯に。

「くっ……とにかくそこをどけ！ どかないと、お前を、殺さなきゃならなくなる」

レックスも、親友とは戦いたくない。だが、このままでは任務のために戦わなければならなくなる。

「俺はお前達をこの先に通すわけにはいかない」

そう、守り抜くと誓った。

今度こそ、大切な人を。

だからここからは、一步も譲れない。

「……ならば、戦うしかない……か」

苦渋の選択を強いられたレックスの表情は、複雑である。だが、任務のためにはアルクを倒さねばならない。

「いくぞ！」

アルクは腰にさげていた剣を抜いた。

「任務遂行を妨げる敵を殲滅する。各員、心してかれ！」

「了解！」

討伐隊も剣を抜き、戦闘態勢をとる。

今、戦いの、幕が開けた。

討伐隊の数は、ざっと見渡すところ、およそ千人。

魔女討伐の任務だけあって、大軍である。

元騎士団であるアルクはそう思ったが、今は眼前の敵と戦わなければならぬ。この絶望的とも思われる状況下で、彼は戦わなければならないのだ。

魔女討伐隊に選抜されているということは、どの兵も相当腕が立つことが予想される。

が、アルクにそんなことは関係なかった。

「うおおおおおおおっ！」

雄叫びをあげながら、アルクは敵陣に突っ込む。

「馬鹿な!？」

光速かと思われるような、超速度での斬撃。

それは確実にその兵士の右腕から剣を奪う。

宙に舞う剣を拾う時間など、全く与えない。

そのまま素早い連蹴りに攻撃を繋げ、相手は為す術もなく吹き飛ばす。

蹴りは正確に頭を狙っていた。

いくら剣の切れ味がよかったとしても、鎧の上からではダメージを与えられない。

そのため、アルクはこういう戦法をとったのだ。

「速い!？」

アルクは止まらなかった。

兵士達が全く捉えられないほどのスピードで、次々に敵を倒していく。

その様は正に、閃光。

『閃光の騎士』

騎士団に所属していた頃、人々は彼のことをそう呼んだ。

王国騎士団最速とまで言われたその男は、今正に、閃光の如きスピードで、討伐隊の面々を屠っている。

「これが、閃光の騎……ぐあっ！」

言い終わる間もなく、また一人兵士が蹴り飛ばされる。「もらった!」

アルクが蹴り終えた瞬間の一瞬の隙を狙って、両側から二人の兵士が斬り込んでくる。

だが、アルクはそれを予測していた。

着地の瞬間に更に跳躍。

凄まじい速度での回転斬りを炸裂させ、二人の剣を吹き飛ばす。
それは舞うような動き。

芸術的とまで言えるほどの一連の動きは、ここが戦場でなければ、
見る者を魅了させたであろう。

彼が『閃光の騎士』と呼ばれる所以は、何もその超人的なスピード
のためだけではない。

彼の最も強い武器は、その超人的なスピードで動く中で、瞬時に
敵の攻撃を予測、そして最良の判断を下すことのできる、動体視力
と判断力だ。その能力は、彼の窮地を幾度と無く救ってきた。彼の
思考もまた、『閃光』なのだ。

「鎧もつけていない相手に、負けてたまるか！」

そう、アルクは鎧をつけていない。

それが彼の戦闘スタイルなのだ。

鎧をつければ、その重量の分スピードが遅くなる。

アルクはそれを嫌ったのだ。

スピードを追求するために。

その結果生まれたのがこの戦闘スタイルだった。

「当たりは」

くると旋回し、敵が繰り出した斬撃を回避。

「しない！」

そのままその勢いを利用してカウンター。

敵の剣は宙を舞う。

そして連蹴り。

「さすがだな、アルク」

後方で指揮をとっていたレックスが、そう言った。

アルクは怒濤の勢いで敵を倒していた。

あれだけの人数から繰り出される攻撃を、アルクは全て回避した
のだ。

もはや奇跡とでも呼ぶべき所業だ。

「だが、残念ながら、ここでお前は終わりだ」
言い放つレックスの表情は、複雑だ。

「何？」

「気づいているぞ、アルク。お前はもう、限界に近い程疲弊している」

「くっ……」

レックスの言っていることは本当だった。アルクはその身体能力、そして卓越した思考能力故に、心身に蓄積される疲労も常人のそれを遙かに超えている。

そのため、体力を激しく消耗していた。

「さあ、今からでも遅くはない。戻ってくるんだ。お前ほどの男なら、騎士団への復帰も十分考えられる。さあ、俺と一緒に来るんだ」
レックスはアルクを説得する。この絶望的状况から生き延びることなど、まず不可能だ。数が違いすぎる。

きつと、目を覚ましてくれるはず。

そうレックスは思っていた。

「最初に言ったはずだ。俺は、ここから一步もお前達を通さない」
しかし、アルクは一步も譲らない。

強い覚悟をその目に宿し、なおも彼らの前に立ち塞がる。

「馬鹿な……魔女の為に何故そこまでするんだ！」

レックスの叫び。

何故だ。

何故、魔女の為にそこまでする。

魔女は敵だぞ。

レックスの心の中は疑問と憤りでいっぱいだった。
親友を手にかけることなど、したくなかった。

だが、任務の妨げになっている以上、排除せねばならない。

「くっ、総員、この男を全力で叩き潰せ！」

苦渋の選択で、隊員に命令を下す。

「了解！」

一斉に構える隊員たち。

「うおおおおおおおっ！」

それでも彼は、敵に立ち向かう。

彼女を、アニーを守りたい。

ただその一心だけで。

☆
☆
☆

朝、アニーは目を覚ました。

ご飯を作らなくちゃ。

そう思って、アニーはキッチンへと向かう。

そこで、違和感に気づいた。

いつもなら早起きしてテーブルに座っているはずのアルクがいなかった。

寝坊かしら。

そう思い、アニーは朝食の準備を始める。

その時だった。

アニーがはめていた指輪が激しく光り始めた。

アニーは、それを見て血相を変え、外へと飛び出した。

☆
☆
☆

「その状態でよくやったよ、アルク。だが、もう本当に限界がきたようだな」

レックスの言葉通り、アルクはもはや限界と言ってもいいほどに

体力を消耗していた。

「まだ……だ、まだ、俺は倒れる訳にはいかないんだ！」

アルクは、もはや立っているのもやっとの状態になっていた。

それでも、彼は諦めない。

自分が倒れたら、誰がアニーを守る？

ここで倒れるわけにはいかないのだ。

だが、そんな想いも空しく、敵の大軍は容赦なく自分に襲いかかってくる。

もう駄目か。

そう思ったその時、

歌が、聞こえてきた。

それは、優しい、優しい歌。

優しい世界を歌った、純粋な歌。

戦場に似つかわしくないその歌声が、奇跡を起こした。

バタリ、バタリと、次々に兵士達が倒れていく。

「アルクさん、ごめんなさい。私のせいで」

森から出てきた少女、アニーはそう言った。

「君のせいじゃない。俺が君を守りたかった。ただそれだけだよ、アニー」

自分一人の力で、守りたかった。

だが、結局はアニーの魔法に助けられてしまった。

自分の無力さを痛感する。

「それより、何で俺がここで戦ってるってわかったんだ？」

「指輪です。あの指輪には、魔力が込められているんです。片方の指輪を持つ人に危機が迫っている時、もう片方の指輪が光るようになっています」

「そうだったのか……」

納得するアルク。おそらく、亡くなったお婆さんが、何か仕掛けをしていたのだろう。

「みんな、死んでるのか？」

急に倒れた兵士たちを見ながら、アルクは問う。

「いえ、気を失っているだけですよ」

アニーの言葉を聞いて、アルクは安心した。

もし、自分のせいでアニーが人の命を殺めてしまったらと思うと、耐えられなかった。

「そうか。とにかく、こいつらが気を失っている間に、逃げよう」

アルクがアニーの手を引く。

「待て」

静かだが、重みを帯びた声。

「俺は、お前達を倒さねばならない」

地面に伏せている状態から、ゆっくりと立ち上がったのは、レックスだった。

「お前、気を失ったんじゃないのか？」

「俺がこの程度で気を失うとでも？」

レックスは、凄まじい精神力で意識を保っていたようだ。

「やっぱりお前は一筋縄ではいかないか……」

できれば戦いたくはなかった。

親友と敵対するのは悲しかった。

だが、ここで戦わねば、アニーを守ることができなくなる。

「アニー、君はこの戦い、手を出さないでくれ」

既に体力の限界は迎えていた。だが、最後の力を振り絞り、戦わなければならない。

レックスとの一騎打ち。

せめて、正々堂々とした騎士道精神溢れる戦い方で親友と戦いたい。

それが、アルクとレックスの望みだった。

「わかりました……」

アニーも頷き、後退する。

「レックス、俺は彼女を守り抜く」

「アルク、魔女討伐の邪魔をするお前を、放っておく訳にはいかな

い」

レックスはそう言って、鎧を脱ぎ捨てた。
アルクのスピードに対応するためだ。

お互いに剣を構え、睨み合う。

互いに、緊張が走る。

「行くぞ！」

二人は同時に駆け出した。

最初に仕掛けたのは、レックスだった。

身の丈ほどもある大剣を大きく振りかぶり、一気にアルクに叩きつける。

それを難なくかわしてみせるアルク。

即座に反撃しようとする。

だが、レックスはそのまま大剣を振り上げ、アルクを狙っていた。
それを剣で受け止める。

刃と刃のぶつかり合う金属音が響く。

アルクの剣は確実にレックスの斬撃を受け止めていた。

だが、大剣との重量差は埋めようがない。

そのまま吹き飛ばされてしまう。

なんとか着地。

そして大地を蹴り上げ、相手との距離を詰める。

一閃。

それを、レックスは大剣で弾いた。

互いに再び距離をとり、対峙する。

「やるな、レックス」

「お前もな。さすがは閃光の騎士といったところか」
互いに一歩も譲らない。

「そろそろ、本気でいかないか？ お互い」
アルクは言った。

アルクの言う通り、お互いにまだ本気ではない。

先ほどの戦いは、お互いの手の探り合いのようなものだ。親友とはいえ、本気で戦うのは初めてだ。

そのため、二人は慎重になっていたのだろう。

「ああ、では、行かせてもらおうぞ！」

レックスが大剣を構え、一気に駆け出す。

アルクもまた、剣を構え、一陣の風となる。

アルクは閃光の如きスピードで、レックスの後ろに回り込む。

レックスに向けて繰り出される、高速の斬撃。

それを予測していたのか、レックスは大剣を振り向き様に薙ぎ、アルクの刃を受け止める。

反動で刃を弾かれるアルク。

だが、そのまま一回転してもう一度攻撃。

レックスはこれも大剣で弾く。

そのまま弾かれたアルクに横薙ぎの一撃を浴びせかける。

だが、アルクはこれを利用。大剣の刃の上を踏み台にし、凄まじい速度での連蹴りをくらわせる。

頭に命中。

普通の人間なら意識を失っているところだが、レックスの打たれ強さは、常人のそれを遙かに凌駕している。なんとかこらえたレックスは、大きなモーションで大剣を振り抜く。

アルクは回避しようとするが、対応しきれずに空中でそれをくらってしまう。

鮮血が飛び散る。

まともにくらえば即死に値する攻撃だ。

だが、咄嗟に身をよじって回避していたため、腹部を狙ったその攻撃をそらし、なんとか一命は取り留めた。

「ぐっ……」

アルクはそのまま倒れ込んでしまう。

「アルクさん！」

アニーの、悲鳴にも近い叫び声が聞こえる。
死が、すぐそこまで迫っている。

それが感じられる程の重傷。

「もうお前の負けだ。さっさと降参しろ、アルク」

レックスは勝利を確信し、余裕の表情でそう告げる。「俺は、守り抜く……必ず！」

もう大切な人を守れないなんて、絶対に嫌だ。

今度こそ必ず、命を賭して、大切な人を、
守り抜く！

「何!？」

気合いで立ち上がったアルク。

「おおおおおおつ！」

雄叫びを上げ、超速度で駆け出す。

「なっ、速……」

言い終わる前に、凄まじい速度で繰り出される斬撃の嵐にさらされる。

防御するが、その勢いに押され、徐々に後ずさってしまう。

レックスは、恐怖すら感じていた。

先ほどのアルクとは、気迫が圧倒的に違うのだ。何が彼を

そこまで駆り立てるのか。

そんなにも、魔女のことを愛しているのか。

「しまっ……」

ついに体勢を大きく崩してしまう。

その隙をアルクが見逃す訳もなく、渾身の力を振り絞った一太刀が、レックスを襲った。

鮮血と共に、倒れるレックス。

「お前の、勝ち……だ」

最終話

レックスとの一騎打ちに勝利したアルクは、アニーと共に逃亡を図ることにした。

だが、行く当てが全くない。

何より、追っ手の心配がある。

それが二人を悩ませていた。

「アルク……最果ての森を出て……国外へ、出ろ……王の所へ行き、俺の名を出して説明すれば……なんとかしてくれるはずだ……」

唐突に声がした。

途切れ途切れの声で、そう言ってくれた。

「これは……森の向こうの国の王から賜った……腕輪だ。これを見せて、俺の名を出すんだ……」

そう言って、自分の右腕につけていた腕輪を、アルクに渡そうとする。

「レックス……お前……」

腕輪を受け取り、レックスの方を目に涙を浮かべながら見るアルク。

「早く行け！ 追っ手のことは……俺が……なんとかしてやる……」
レックスは、アルクの守り抜くという強い意志に心打たれていた。
アニーのことを、本気で愛しているというのがよくわかったのだ。
友が貫き通した信念を、認めることができたのだ。

「ありがとう……生きて、また会おう」

親友に、感謝の言葉を告げ、アニーの手を引いて森の中へ。
ただひたすらに、走った。

王国の外を目指して……

森の出口が見えてきたところで、アルクたちは立ち止まった。
出口の向こう側に、国境がある。そこには、二人の警備兵が立っ

ていた。

どうすればいいのか。このまま腕輪を見せただけで入れるのだろうか。

アルクが悩んでいると、後ろから何やら音がする。

後ろを振り向くと、馬車がやってきていた。

「どうしたんだい？ 兄ちゃん、嬢ちゃん。困ってるのかい？」

先頭で馬の手綱を引く男性が、二人に話しかけてきた。

「は、はい……」

若干戸惑いながら答えるアルク。

「乗れよ」

「え？」

急に発せられた男の言葉を、アルクは信じられなかった。

「訳ありなんだろ？ 何も言わなくていいぜ。乗りな」

そう言って男は荷台を親指で指し示す。

「いいんですか？」

「ああ」

この男を信じていいのかどうか、二人は悩んだが、男の風貌からすると、行商人のようだ。何かしらこちらの事情を知っているとも考えにくい。

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます」

考えた結果、二人は男を信じることにした。

「じゃあ、さっさと乗りな。今から国境を渡る」

男はそう言いながら荷台の方を親指で指す。アルクとアニーは荷台に乗り込んだ。そして、しっかりと身を潜める。

「じゃ、出発するぜ」

男は馬車を走らせる。

「通行許可証は？」

国境に着くとすぐに、警備兵が男に尋ねた。

「ああ、これでいいか？」

「よし、通っていいぞ」

男は通行許可証を見せ、国境を渡る。

しばらく馬車で走った後、アルクとアニーは荷台から降ろしてもらった。

「本当に、ありがとうございました」

二人は男に感謝の言葉を告げる。見ず知らずの自分たちに親切にしてくれたこの男には、感謝してもしきれない。

「いいってことよ。俺はいろんな所を旅して、商売をやってるが、兄ちゃん、アンタみたいないい眼をした奴は、滅多にお目にかかれねえ。なんか、助けたくなっちゃった」

「あ、ありがとう……」

なんと言ったらいいいのかわからず、アルクは礼を述べる。

「ま、気にするな。アンタ騎士かなんかだろ？ 実は俺も、昔は騎士だったんだ。見ての通り、今は商売をやってるんだがね。あゝ……ちゃんと守ってやれよ、嬢ちゃんのこと」

男は感慨深そうにそう話す。騎士だった頃を思い出しているらしい。

「はい、必ず」

真っ直ぐ男の目を見つめ、アルクはそう言った。

「ははっ、そうか。じゃ、元気でやれよ」

軽く手を振り、男はその場を去っていった。

アルクとアニーはそれを感謝しながら見送り、王都を目指し、歩き始めた。

☆ ☆ ☆

王国を抜けてから、二年の月日が流れた。

アルクとアニーは、王国の隣国で、平穏な暮らしを手にすること

ができた。

腕輪を見せ、レックスの名を出すと、国王はすぐに会ってくれた。レックスは、仕事上、国外へ出かけ、外交に携わることも多かった。どうやらその時に、この国の国王に気に入られていたようだ。国王の計らいと、レックスのおかげで、なんとか無事に過ごせている。

ひとまずの平穩を、二人は手にしていた。

「ご飯できましたよ」

キッチンからアニーの声。

アルクは、剣の手入れをするのを止め、食事に向かう。「お、今日はご馳走じゃないか」

テーブルには、豪華な料理の数々が並んでいる。

「だって、今日はあの人があるんでしょう？ 久しぶりの再会なんだから、おもてなししてあげなくっちゃ」

アニーの優しい声を聞きながら、アルクはコーヒーを飲む。ブラツクだから、ちょっと苦い。

「まあ、たまにはいいか」
ほっと一息。

トントントンッ。

その時、扉をノックする音が聞こえた。

「はいはい、今出ますよっ、と」
アルクは扉を開ける。

「いらっしやい、レックス」

最終話（後書き）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。
できれば評価、感想などいただけると嬉しいです。
今後に活かしていきたいと思えますので。
では、お疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6261f/>

騎士と魔女

2010年10月8日15時58分発行